

平成 26 年度教育関係共同利用拠点シンポジウム 「船で学び，海に学ぶ～共同利用拠点勢水丸の航跡～」

岡田 果林^{1*}・内田 誠¹・前川 陽一¹・中村 亨¹・小田巻 実²

¹ 三重大学大学院生物資源学研究科附属練習船勢水丸

² 三重大学大学院生物資源学研究科

Symposium report on “Learning in the ship and from the sea – Track of SEISUIMARU authorized as inter-university common-use educational center -”

Karin OKADA^{1*}, Makoto UCHIDA¹, Yoichi MAEKAWA¹, Toru NAKAMURA¹ and Minoru ODAMAKI²

¹ Training and Research Vessel SEISUIMARU, Graduate School of Biorcsources,
Mie University, 1819-18 Oguchi-cho, Matsusaka, Mie 515-0001, Japan

² Graduate School of Biorcsources, Mie University, 1577 Kurimamachiya-cho, Tsu, Mie 514-8507, Japan

Abstract

This symposium, “learning in the ship and from the sea - Track of SEISUIMARU authorized as inter-university common-use educational center -”, was held on December 12, 2014. The purpose of the symposium is to review the past activities of the center, and to examine the future work and improvement. Many students, professors and staff belong to the Faculty of Bioresources, Mie University participated in the symposium. Educational programs were presented by professors of Nagoya University, Yokkaichi University and Mie University. Finally, the prospects for SEISUIMARU were discussed.

Key Words: 教育関係共同利用拠点制度，勢水丸，食文化教育

1. はじめに

平成 26 年 12 月 12 日，三重大学環境・情報科学館 1F ホールにおいて，教育関係共同利用拠点シンポジウム「船で学び，海に学ぶ～共同利用拠点勢水丸の航跡～」が開催された。

教育関係共同利用拠点（以下，共同利用拠点）とは，附属教育研究施設や教育研修施設などの大学の教育関連施設を文部科学省が共同利用拠点として認定し，大学間の共同利用を進めさせ，各大

学が自らの強みを持つ分野へ取組を集中・強化するとともに，大学間連携を進め，大学教育全体としてより多様で高度な教育を展開していくことを目指すものである。三重大学大学院生物資源学研究科附属練習船勢水丸は平成 22 年 6 月に認定を受け，教育関係の共同利用を推進してきた。

その取り組みの中で，共同利用拠点としての活動を広く一般に知ってもらうため，平成 23 年度よりシンポジウムを行ってきた。本シンポジウムはその 4 回目で，「船で学び，海に学ぶ～共同利

2015 年 2 月 27 日受理

¹ 〒 515-0001 松阪市大町 1819-18（練習船基地）

² 〒 514-8507 津市栗真町屋町 1577

* For correspondence (e-mail: okadakar@bio.mie-u.ac.jp)

用拠点勢水丸の航跡～」と題し、共同利用拠点第1期5年間の総括を行うとともに、平成26年7月に再認可され第2期に向け動き出した共同利用拠点の意義を再認識するという趣旨のもと開催された。

2. 概 要

三重大学大学院生物資源学研究科の加納哲副研究科長による開会の挨拶の後、共同利用拠点からの報告として、谷村篤前共同利用拠点支援室長、原田泰志共同利用拠点支援室長による講演を行った。続いて、共同利用校として長年勢水丸を利用している、名古屋大学大学院環境学研究科角皆潤教授と四日市大学環境情報学部千葉賢教授からこれまでの実習とこれからの展望について報告を受けた。最後に、今年度をもって退職する内田誠勢水丸船長の特別講演を行い、5年間の締めくくりとなるシンポジウムを閉会した。

(1) 共同利用拠点からの報告

「共同利用拠点認定の経緯と第1期の始まり」

前共同利用拠点支援室長 谷村篤教授
谷村篤教授（国立極地研究所）から、申請から第1期の始まりについて講演があった（図1）。はじめに、共同利用拠点制度の目的や認定基準についての話と、当時新船だった勢水丸が共同利用拠点事業申請へ向かう経緯についての話があった。申請に当たって課題となったのは、教育研究活動の、大学の教育理念に基づいた機能別分化・個性化・特色化といったソフト面での基準であった。機能別分化として中型船の特色を活かした運航とプログラムの提供（単独航海と公開実習航海）、

個性化・特色化として伊勢湾・熊野灘を中心とした黒潮流域での環境計測・漁業体験・ものづくり体験を組み合わせたプログラムの提供を行うことでその基準をクリアした。次に、この共同利用拠点の特色を最も示している「食文化教育」についての話があった。ここでの「食文化教育」とは、人文科学的な「食文化」のみならず、自然科学的な「生物資源・環境」までも加味した広い分野での教育を意味する。食文化教育を中心に据えた海洋食文化実習航海の概要とその成果について触れ、食文化教育の有用性を説いた。最後に、今後の共同利用拠点事業の方向性と可能性について触れ、地域固有の魅力や価値を教育し、地域社会の活性化に貢献していくことを期待するとの言葉があった。

「共同利用拠点活動の継続と発展」

共同利用拠点支援室長 原田泰志教授

谷村前室長に続き平成24年度から共同利用拠点支援室長の原田泰志教授より、共同利用拠点活動の詳細と今後の課題について講演があった（図2）。最初に、共同利用拠点活動の柱の一つである共同利用実習航海の分類と共同利用校の推移についての話があった。その中で、共同利用拠点事業の目玉である海洋食文化実習航海について、平成24年度は陸上実習を尾鷲市で行う尾鷲コース1航海であったのが、平成25年度からは志摩コースを開始し、今後は伊勢湾地域を対象とした航海を設定するなど、食文化教育の充実を図っているとの説明があった。次に、その他の活動としてシンポジウムや学則の改正、事業報告書の作成などを行っていることに触れ、その結果、利用校・利用人数が大幅に増加したと報告があった。最後に、



図1 谷村篤教授の講演の様子



図2 原田泰志教授の講演の様子



図3 角皆潤教授の講演の様子



図4 千葉賢教授の講演の様子

平成 26 年 7 月に翌年度からの再認定が決定したこと、新たな実習の計画および利用校・利用者のニーズへの対応などの課題が述べられた。

(2) 共同利用校からの報告

「大気水圏フィールドセミナーⅡ」

名古屋大学大学院環境学研究科 角皆潤教授
単独航海で勢水丸を利用している名古屋大学の角皆潤教授から、実習航海「大気水圏フィールドセミナーⅡ」についての報告があった(図3)。大気水圏フィールドセミナーⅡについての概説があり、事前の講義で分析手法を学び、船上では採水直後に研究室で分析処理、航海後は陸上の実験室でさらに分析処理を行い、最後にレポートを提出するという一連の授業となっているのが特徴との説明があった。また、単に採水観測して分析してデータを出すのではなく、あらかじめ課題を与えてレポートにまとめさせるようにしているとのことで、平成 26 年度航海の観測結果を引用して成果の解説が行われた。

「伊勢湾海洋調査実習」

四日市大学環境情報学部 千葉賢教授
同じく単独航海で利用している四日市大学の千葉賢教授から、実習航海「伊勢湾海洋調査実習」についての報告があった(図4)。はじめに伊勢湾海洋調査実習の概要について触れ、海洋調査方法の基礎を学び伊勢湾周辺の環境状態を理解することを目的とし、実習は事前授業・実習航海・事後授業からなり、まとめられた調査結果は関連授業へ活用されているとの説明があった。次に、継続して実習航海を行うことで判明してきた結果についての報告があった。その一つが、湾口の伊良



図5 内田誠船長の講演の様子

湖水道での潮汐混合により湾内水と湾外水の間密度の海水が生成され、湾内の中層に貫入する実態が捉えられたことである。最後に、今後も実習航海を継続するとともに、今後は湾奥から湾外まで観測線を延伸し、汽水域から外洋域まで環境の違いを理解させるような実習を行いたいとの希望が出された。

(3) 特別講演

「拠点事業とともに船出した二代目勢水丸」

勢水丸 内田誠船長

シンポジウムの最後に勢水丸の内田誠船長から、共同利用拠点事業の概要とその中核を担う食文化教育や食文化についての講演があった(図5)。はじめに、共同利用拠点が開始されるまでの話があり、その後他大学の練習船も認定され、現在ではそれぞれの主活動海域において拠点活動を展開し日本周辺海域をカバーしているとの説明があった。次に、勢水丸の共同利用拠点事業の特徴である食文化について考察がなされた。食文化といっても様々な視点があるが、ここでは生物が生きていく上で必要不可欠な塩と日本人の主食コメにつ

いて話があった。狩猟生活から農耕生活になるにつれ、食材とは別に塩の摂取が必要となってきたこと、その結果海水から塩が生産されるようになり、調味料や醤油や魚醤などの加工材料、漬物などの保存材料として活用されるようになったことに触れた。そして、日本人の主食の変遷について語られ、塩やコメが日本の食文化の基礎にあることが示された。最後に、共同利用拠点事業第2期において、冷蔵・冷凍に代表される現代の加工・流通技術に合わせた新しい食文化の創造を盛り込むことも期待するとの言葉で講演を締めくくられた。

3. おわりに

本シンポジウムは教育関係共同利用拠点第1期のまとめとなるもので、その申請から5年目の平成26年度までの事業の流れを概観する講演内容となった。参加者は、三重大学から78名（教員21名、職員20名、学生37名）、他大学から5名（教員5名）、一般3名の計86名で例年より少なかったが、学生の参加も多く、共同利用拠点事業が広く認知されていることの表れではないかと考えられる。また、質疑応答の時間には活発な意見交換があり、「三重大学には勢水丸だけでなく水産工場など関連施設もあり、地元企業との共同開



図6 質疑応答の様子

発研究にあったように、共同利用拠点事業が有機的に発展していくことを期待する」等の意見があった（図6）。

本年度は共同利用拠点第1期の締めくくりの年であると同時に、再申請が認可され、また京都大学総合人間学部や北里大学海洋生命科学部などの新たな共同利用も始まり、第2期に向けて新たなスタートを切った年でもあった。共同利用拠点事業第2期に突入するに当たり、これまで培ってきた教育プログラムや地域との繋がりを継続するのはもちろんであるが、本シンポジウムで提示されたような、利用校・利用者のニーズへの対応や現在ある教育プログラムの強化や刷新、新しい教育プログラムの創設などの課題に取り組み、共同利用拠点活動を発展させていく必要がある。